

「塩の道」糸魚川-大町-松本-塩尻を結ぶ歴史の道

私たち人間の体にとって塩は欠かせないミネラルです。しかし、日本列島においては山間部で塩分を採取できるのはごく限られ、その多くは海水を煮詰めた塩や海産物から摂取しています。海水を煮詰める塩作りは、すでに縄文時代に行われ、専用の土器が各地の遺跡から発見されています。



上杉謙信が、今川・北条の塩止めで苦しんでいる武田信玄に塩を送ったという逸話「塩の道」を舞台に語られる「敵に塩を送る」は有名な史実として語られています。

起点となる糸魚川地方では古くから塩作りが行われ、平安時代の遺跡からは海水を煮詰めるバケツ状の土器なども出土しています。海と山が近く、海水を煮詰める薪を身近で調達し、その後も塩作りが盛んに行われるようになり、江戸時代にはピークをむかえました。また、北前船によって瀬戸内の塩も運び込まれるようになり、海産物とともに信州へ盛んに運ばれるようになりました。その道の一つが国の史跡に指定される「松本街道」です。加賀街道と松本街道の分岐近く、現在の糸魚川市白馬通りには塩や海産物の問屋が軒を連ね、それらを運搬するボッカや牛方で賑わいました。

糸魚川産や瀬戸内産の塩は、姫川流域の険しい山間を縫う松本街道を通過して、小谷・白馬、大町、安曇野、そして松本城下、塩尻まで運ばれました。もちろん、この他にも、全国各地に海と山を結ぶ道があり、塩や海産物が盛んに運ばれたことから「塩の道」などと呼ばれています。糸魚川からは塩や海産物が運ばれ、信州からは大豆、煙草、麻などがもたらされ、街道の沿線は大いに賑わいました。

物資は変わっても、お互いに無いものを補う交易ルート「塩の道」は、人、物、文化が行き交うまさに歴史の道なのです。

松本市の歴史は古く奈良時代には信濃国の国府が置かれるなど当地方の中心地として発展してきました。1500年過ぎに松本松本城が築かれ、1582年に当時の領主小笠原貞慶が本格的に松本城を改修し、近代的な城下町として整備されました。

松本市は松本藩の藩長が置かれた行政の中心だけではなく、糸魚川と結ぶ「塩の道」や善光寺と結ぶ「善光寺街道」、飛騨高山と結ぶ野麦街道が交差する交通の要衝として経済的にも発展しました。国宝の松本城を中心に古い建物や町並みが良く残る城下町です。中町や縄手通りはその代表です。

